

巻頭言

年頭所感

林 文子

元旦に尾長鶏の長鳴きを聞いた。ラジオの電波にのったおめでたい雄叫びで酉年の新年を祝福してくれた。ほほえましい程に、嘶家のしゃがれ声とも聞こえる淡々とした鳴き声の、本当に長い一鳴きであった。

正月2日が91歳の誕生日という住井すゑさんのお元気な映像に接した。長編「橋のない川」の作家である。書き続けて8編になったとのこと、今もなお人間平等をあつつぼく語る信念の人である。地球上の平和は人々が人間平等の精神を持たなければならない、生きているかぎり書き続けると、子どもの頃決意したことは強いとも言われた。長い歳月はこの方の人柄を完成に導き、悠々と焦らぬ余裕の心が、穏やかに伝わってきた。

年の暮れにとどいた日学双書16に、堀尾輝久、日本学術会議会員東大教授の日本学術会議公開講演会における記録「地球時代の子ども観」のなかで“ルソーのエミール”という著作(1762)の引用文を見つけた。

“人間は弱いものとして生まれる。だから、周りの人々の手厚い配慮を必要としている。しかし、その弱さは同時にたくましく豊かに成長するそのしなやかさでもあり、その弱さのなかにこそ発達の可能性が秘められているんだと……”

「子どもが未熟であるということは、それは大人をモデルにして、それにまだ至らないという意味での未熟ではなくて、これから発達する可能性を持った存在なんだと……」堀尾先生の解説である。

“自然は子どもが大人になる前に子どもであることを望んでいる。この順序をひっくり返そうとすると、成熟してもいない、味わいもない、そしてすぐに腐ってしまう促成の果実を結ばせることになる。私たちは若い博士と老い込んだ子どもを与えられたことになる。” さらに、“大人が知っていなければならないことをすべて子どもが学ぶ必要はない。子どもにはそれぞれの時期に適した有益なことすべてを教えるようにするがよい。教育という仕事は、時を稼ぐために時を無駄にすることを心得ておかなければならない”「現在読み直しても、味わい深い表現……」である。

人の教育は、子ども時代から始まって生涯にわたって必要だと言われて久しい。家庭と学校と社会がともに担うべき、息の長い大事な仕事である。余裕の心を失わず、弱い成長の芽を大切に育てて欲しいとねがう。

(健康文化振興財団理事長)